

進化と文化とこころ

——生物的視点と社会的視点からこころを探る

平石界 (こころの未来研究センター助教)

Kai Hiraishi

ヒトと人：人間存在の多層性

人間を表す語は多くある。「人間」と書くことも「人」と書くこともできるし、「ヒト」と書けば「人」とは異なる含意を持つ。「ホモ・サピエンス」と書けば、その違いはいっそう際だつ。これだけさまざまな呼び方があるのは、おそらく、人間という存在の多層性を反映してのことだろう。逆にいえば「人間とは何か」そして「人間のこころとは何か」という問いに答えようとするのならば、「人のこころ」「ヒトのこころ」「ホモ・サピエンスのこころ」といった、さまざまなレベルからの問いかけが必要となる。実際、人間存在を追究する営みは、宗教、哲学、文学、政治学、経済学、社会学、心理学、人類学、そして生物学や脳神経科学など、多層的に厚みをもって行われてきた。本研究プロジェクトはそれらの中から、特に「進化」と「文化」という切り口から迫るアプローチを取り上げ、それぞれのアプローチを専門とする研究者間の交流とコミュニケーションを促進することを目的としている。

進化と文化、自然と人工は相反するか？

「進化」と「文化」という2つの視点は、いわば「自然」と「人工」という形で、相反するもののように捉えられることが多い。しかし「自然」と「人工」はそもそも対立する概念だろうか。

「利己的な遺伝子」で有名なドー

キンスに『延長された表現型』（紀伊國屋書店、図1）という本がある。「表現型」とは、遺伝子のタイプが、実際の体やこころに現れたもののことである。身長や体重はもちろん、性格なども表現型である。だからといって表現型が遺伝子によって100%決定されているわけではない。たとえばセロトニンという物質にかかわる遺伝子について、SSタイプの人には抑うつになりやすいことが知られている。しかしSSタイプの人が全員うつ病になるわけでは、もちろんない（日本人の多数はSSタイプである）。

ドーキンスは、この表現型が、個体の体の外にまで延長されると論じる。たとえばビーバーは川をせき止めてダムを造る。このダムはビーバーの遺伝子の「延長された表現型」だと言うのである。さらにダムによって周囲の環境も変化し、そこに暮らす動植物にも影響を与えるだろう。これらの影響もすべて含めてビーバーの「延長された表現型」であるとドーキンスは論じる。

同じことが人間の活動についても言える。今、私がこうして書いている文章は、広義に考えれば、私の遺伝子の延長された表現型である。そしてこの文章は、私だけの延長された表現型ではない。なぜなら「延長された表現型」というアイデアそのものが、ドーキンスの延長された表現型だからである。そのドーキンスはダーウィンに影響を受けており、ダーウィンはその先人の影響を受けており……という形で、表現型



図1 ドーキンス『延長された表現型』（紀伊國屋書店）

は時間空間を超えて延長され、「文化」を形成する。

そして逆に、文化が遺伝子に影響を与えることもある。たとえば牛乳など家畜の生乳を消費する地域では、遺伝的にラクトース分解酵素を持つ人が多い。つまり文化によって進化が起きている。「文化」が、もっとも広い意味の延長された表現型、すなわち「自然」の一部であることが分かるだろう。

このように書くことで「自然」と「人工」という区別が無意味であると論じたいわけではない。時として両者を区別することは必要である。しかし2つは本質的には連続することを忘れてはならない。そして連続性があるからこそ、「進化」と「文化」という視点からの人間研究は共通の基盤を持ちうるし、持つべきである。それが、本プロジェクトをスタートさせた最も大きな動機である。

プロジェクトの第1の軸： 共同講義

本研究プロジェクトは3つの軸によって推進されている。第1の軸は、こころの未来研究センターに所属する進化心理学者（平石）と文化心理学者（内田由紀子）による共同講義である。京都大学の全学共通科目である「こころの科学入門Ⅰ」では、平石と内田に吉川左紀子こころの未来研究センター長を加えた3名で、「理論」「感情」「他者理解」「対人関係と自己」「言語」という共通テーマにたいして、進化心理学、文化心理学、認知心理学の立場から各1回ずつ講義を行い、さらに講師3名と受講生によるディスカッションを行っている。

また、より専門的な内容を扱う講義として、総合人間学部の学部特殊講義「こころの科学」も開講している。半期は「進化」、半期は「文化」を中心テーマに据え、専門家を招いてのゲスト講義も含めて講義を進めている。2010年度夏学期には、後藤和宏氏（京都大学生命科学系キャリアパス形成ユニット・脳機能総合研究センター、本号24～27頁参照）による動物の認知研究、森崎礼子氏（こころの未来研究センター）による犬の進化と認知、中尾央氏（京都大学文学研究科）による文化進化についてのゲスト講義を行った。冬学期は、こころの未来研究センター客員准教授であるベス・モーリング氏（米国デラウェア大学・文化心理学）にも講師として加わっていただいている。

こころの働きにかんする各テーマを進化と文化双方の視点から取り上げることにより、心理学を学ぶさまざまな領域の学生にこころの多層的理解の必要性を伝えるとともに、われわれ自身もその必要性を再認識する機会となっている。

プロジェクトの第2の軸： ワークショップ

第2の軸はワークショップの開催である。「第1回進化と文化とこころワークショップ」（2010年8月9日）では、竹澤正哲氏（上智大学）による「制度アプローチから考える文化の維持」と、鳥山理恵氏（トロント大学）による「文化伝達：模倣から社会学習まで」という2つの話題提供を中心に、22名の研究者が5時間かけて議論を行った（図2）。これらの議論の中で明らかとなってきたのは、「文化がいかに伝わるのか」という問題の重要性である。

竹澤氏は、米国南部における「名誉の文化」の例を挙げつつ、文化が合理的な制度として説明できることを指摘した。放牧を主たる産業とした開拓地では、侮辱に対して過剰とも言えるほどの強い態度を示すことが、自らの資産（家畜）を守るために有効であったというニスベットとコーエンによる議論である（2009）。しかし、もはや開拓地でもなく放牧が主要産業でもない米国南部で、いまだに名誉の文化は維持されている。こうした文化の“非合理的”な維持を理解するには、文化が伝わるプロセスが明らかにされる必要がある。

鳥山氏は文化伝達において、真似する者（子ども）が、対象者（親など）の行為の意図を理解した上で、まったく同じ行動を取る「真の模倣」が重要であることを指摘した。「意図の理解」と「行為のコピー」の2つがあって初めて文化の累積的変化は可能となる。もし意図だけを理解して、解決方法は個々人が考えるのであれば、文化的知識が積み重なっていくことはない。この違いが、チンパンジーなどの文化と、ヒトの文化



図2 第1回進化と文化とこころワークショップ」（2010年8月9日）で議論する参加者

を大きく隔てるものと考えられる。しかし「真の模倣」は「非合理的な文化の維持」という問題を解決するものではなく、今後の議論がまだ必要とされる。

なお、本ワークショップの内容については、参加した有志によるまとめを、Webサイト上で見ることができ（<http://togetter.com/li/43719>）。

プロジェクトの第3の軸： 講演会の開催

第3の軸は、研究会・講演会の開催である。2010年9月6日には森島陽介氏（チューリヒ大学）を迎え、見知らぬ他者への利他性の個人差と脳活動の関係についての研究を紹介いただいた。11月9日には山田克宜氏（大阪大学）に、社会の平均所得が上昇しても人々の幸福感は必ずしも上昇しないというイースターリンのパラドクスについて、幸福感は他者との比較によって決まるとする立場からの研究を紹介いただいた。

＊

本研究プロジェクトが正式にスタートしたのは2010年度であるが、すでに2008年度から共同講義の開講や、学会におけるワークショップの開催などの形で、平石と内田は「進化と文化とこころ」のコミュニケーションを図ってきた。今後も継続して互いの領域の最新の知見をぶつけ合う場を作ることで、「こころ」の多層的理解への道を探っていきたい。